

郎路生麻◇幹主

川柳新誌

號 月 五

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和二年五月一日發行 每月一回一日發行

川柳雜誌 第四卷第五號

川柳雜誌社發行



「週刊朝日」

懸賞募集

川柳「夏休み」

(選者) 麻生路郎氏

○一人一句官製ハガキ使用の事
○大阪朝日新聞社内週刊朝日懸賞文藝係宛

入賞 第一席(賞金參拾圓)

第二席 同貳拾圓(第三席(同拾圓))
佳作數十名(薄謝)

締切 四月三十日限り

發表 週刊朝日夏季特別號誌上

(其他詳細は週刊朝日に記載してあります)

五月例会

◇日時 五月五日午後七時

◇場所 大阪市南区清水町停留所
西入北側端の坊

◇兼題 「友達」三句

◇會費 貳拾錢

初心者の來會を歓迎す

各地支部増設

本社は川柳の社會化を實現させるため
全國各府縣に支部を増設いたします本
社の趣旨を賛し支部設置を希望する
方は本社宣傳部宛に申込ましたし。

川柳雜誌 第四卷第五號目次

感想・評論

題詠に就て

奈良武の句

研究・其他

唐柳短解

可愛い魂

天國の子供

噫! ロンドン君

省二氏歡迎句會

川柳家戸籍調

川柳書架

▲募 集 句

鳥 籠

妻

豆腐屋

各地柳壇

文樂人形表紙繪

題 字

編輯後記

創 作

川柳塔

蛭子省二

井上劍花坊

川村花菱

龜井花童子

橋本二柳子

同

同

同

同

同

同

同

同

小出楯重
松 郎 生

塚崎松郎

横田眠聲

松本助六

麻生霞乃

岩崎柳路

酒井駒人

檜山千代二

津田耕水

高橋かほる

庄萬よし

橋本二柳子

木村半文錢

安川久流美

諸 家



寢ころんで手紙を書くも春の宵
大の字を書くに子供は念を入れ
物體ない別荘今日も貸家なり
春さいふ氣持で押した乳母車
シャツを脱ぐ前へ出て來てバア云ふ
退院(二句)
全快へお見それ申してをりました
もうすつこをるのさ父の膝へ寄る
壁あればこそ長屋にも住めたもの
不精者その割合に達者なり
結局は貰へる品に遠慮する
下宿料拂うて心細うなり
これよりも沸かぬくお茶がふき
下駄洗ふ手を止めさせて傘の禮
此邊に流行るさ思つた店が出來
弟を抱くさ武骨な父に見わ
入場券母はしつかり握つて居
椅子席によくくすべるプログラム
家へ出す手紙目方のましたこと
食物を見れば人間あさまし
院長の回診にちかたくなり
眠るにもあすの命を信じ切り
氣のすまぬまゝに鏡をふいてゐる
下宿屋の娘の死んだ話も出
頼まれた甲斐なく話つきるなり
先生へ手をあける兒の腰が浮き

高 同 同 廣 同 同 同 登 同 同 同 同 同 同 同 同 神 同 同 同 池 同 同 同 登
知 島 池 戶 田 池 四

濁同同羊同同同杏同同鏹同同一同同小同同同 白同同同其

水 司 三 月 笑 蓬 蝶 象



軍服を着て来た兄にお茶を入れ
 背の子をだましゝて眠らせる
 しまつる事に夫婦の氣が合うて
 口三味に指では糸をはじくまね
 きまらない柄へ亭主も引出され
 炭ついでもた轉任のうはさする
 叱られた後へ欠伸が一つ出る
 月刊誌まづ漫畫から目をまほし
 煎餅屑出す母親へ争うて
 サイレンの速さに野次のあつけなし
 短刀直入お嬢さんを下さい
 酔うて來たらしく話がくさうなり
 俄雨の後四ツ辻ははつきりし
 石疊そろゝ襦をかきあはせ
 内幕を知つて勤がいやになり
 うちの戸のつもりで開けて凄い音
 大欠伸天井の鶴を吹いて見る
 エレベーター鏡の前は氣がひける
 寂光へ雪一すちをふりかへり
 國の母道頓堀に袖を持ち
 踏切番片手ボケツへうつかりし
 耳はぎこおてゝはぎれこ子に甘し
 鏡臺にもうかくされぬ年となり
 きつまたお近いうちへうなづいて

豊橋 同 大 阪 島 知 愛 千 大 同 神 戸 安 東 松 江 横 濱 大 阪 同 大 阪 同 長 野 大 阪 同 同 池 盛 野 西 灘 大 阪 愛 知 七

緑 同 の 一 古 天 醉 源 芳 花 町 夢 ふ さ 籬 高 秋 朱 案 美 芳 笑 吞 樂
 朗 風 岐 香 蝶 人 哉 舟 楓 峰 晴 子 子 坊 雪 人 陽 二
 明 ほ る



題詠に就て

蛭子省 二

八

▲「一番傘」誌に乾坤氏の「題詠可」があつた、私が「キヤリ」誌で發言した事からの續きで、有難い味方の一人になつて下さつた事を感謝しつゝ、「その可不可は論ずる迄の事ではない」「簡単に片附けられたのは嚙を嚙むやうで物足りない、此問題には柳界としてはそんなに古くないかも知れぬが、和歌道では随分論議されたもの國歌の胎生研究をするにわかる『川柳雜誌』では久流美氏が三の八に論ぜられてゐる、氏に對しても多少答へてみたいと思ふ。

▲半文錢氏の「川柳作法」には「既成川柳は多く一つの課題を與へられて其の題下に川柳を作つたのであります、之は俳句でも短歌でも殆んど同じ道程を歩んで居ります、併し今日の革新川柳はさうした一つの課題によつて作られるものではなく自分の生きて行く其の日々の苦惱を表現するのでありますから一

人の作家として見ますと、その人の人生を直觀し思索してゆく諸相に對する生活記録であるのであります、斯ふ云ふ點でその句を作る餘技氣分などは全然ありません」ミ、之れをみるミ課題が既成革新の一分岐原因となり、課題によるは餘技であるミされてゐる。

▲徳富蘇峰先生も「徂徠の言葉に世の中に題詠が出来て歌が墮落したミ云ふのがありますが全くその通りであります、私は題詠は悪いミ云ふのはありません初心の人や慰みのためならば其れでもよいでしょう、然し全くそれになつてしまつては文字の遊戲で言葉を弄ぶものであります、日本の和歌の長い歴史は殆んどそれで概ね文字の遊戲となり、おもしろおかしく調子を揃へた氣轉の利いたものでやつて行ければ良いミしたのであります、それに安心せずして自分の生靈を氣高き所に置くミ

いふのが眞に萬葉に違つたのであります』と。

▲故高山林次郎は『何ぞ自ら居る事卑きや』

と言つて『藝術は生命なり人格なり内より發すべくして外より強ふべからず、藝術は自己の作品に對しては生母なり。紫黄を塗抹するもの必しも畫學にあらず、畫題募集は何の意ぞ題案の撰擇は天才の試石なり、自ら畫題を撰擇する能はざるものは初めより畫かざるに如かず』と。

▲『歌袋』（富士谷御杖）には古歌は心ざしを述べしもの、思ふ事を見るもの聞くものにつけてよめるものなるを説いて『末の世の人やうくこれを忘れて、さかりに題詠を弄ふよりこの方心ざしの言に顯はれたるをのみそれとて、なべてはさならぬやうに心うる輩詞をもこし種を心の外に求めて詠める歌少からず、それ歌の心こ己れが心異なるは、古の道にあらず』

▲然し要するに『題』を餘りに狹義に不自由な束縛的のものに解する謬見がありはしないか、ひいて遂には自己が詩人である立場を自ら冒瀆するに到りはせぬか聊か危ぶむのである、最近一詩友……それは私が新體詩を作つてゐた時代の友……から某青年團歌に應募するに就て二作中ぢちを差出そうか下相談を受けた、無論懸賞附であり作歌條件が五つも定められてゐる、此例に因る此の詩は『青年團歌』と云ふ題詠作であり且つ詩作の本義を無視したかの五ヶ條がついてゐるにせば、安川氏の『大道の富籤類似的遊戲』として詩人を耻辱するものである』と云

ふ事にもなる。

▲されど見せられた二歌は藝術臭の豊かな、其の何れを捨てべきかを今苦しむでゐる、此の實際の事柄をどう處置しようか、題詠廢止論者だからミテンデ保らないならばそれは藝術論でなくて毛嫌ひの感情である。詩人の第一義本性は藝術中心の詩、そのものである必竟題詠條件態度心情なごの辨難は後から縋でつけだ閑葛藤の正しからむとする論議理窟の片鱗も云へる（之れ程の勇猛心がなくて詩人の自尊がどうして保てよう）茲に題詠によつた句ミ因らぬ句ミがあつて、若し前者が後者に優る藝術味のある永久性を有する作品であつたならどう解決を與へるか

▲何々俱樂部の二百圓懸賞でもあの作者が何等の感興なしには句はまごめ得ないであらう、二百圓が欲しいと云ふ慾望……恰も他の詩壇の大家が詩謠を賣つて報酬をうくる如く、文壇の大家が稿料一枚いくら契約して、月の家庭經費を稼ぐ如く……が藝術心を刺戟したならさうか、一等當選の優秀句をみて感服しつゝ作者の心情まで忖度するはいらぬおせつかいと思ふ、又此場合題詠論なきは擡頭しなからうと思ふ。

▲ある遲筆の文士が新聞小説をかき社から督促の電報がきてギリ／＼になるに想が續いてくると告白したのは、其の人が純な思想家であるからだに察する、私の小さな経験でも募集句稿が届けば皿に盛られた林檍が食欲をそそる様に、詩的衝動を得て何等邪な思ひなく選にかかり得られる、直に此の刺戟を得る未

だ一度だに選評を延ばした記憶を持たぬ程感激を與へられる。
無論題詠と否とに係はらない。

▲決して『題』は詩の反逆道たる理智に訴へ十七文字を纏めさせる散文や論文の作法手引ではなく潜在感激をおびき出し機縁により白熱化せしむる焦點で、純なる詩人にはもう題が『題』でない渾然たる藝術三昧境界のものとなつてしまふ、他力方便の教義も純眞な信仰を體得せば他力も方便もない、無量壽不可思議光の愉悅の感謝あるのみである、寄附も惜しくない、生命も惜しくない、即ち二百圓懸賞も欲しくない、生命も欲しくない云ふ大宇宙の詩境に詩人として嚴然たる地位を占め得るのである、ドコ迄も善人なら大惡を感化し得るドコ迄も詩人なら基因の如何を超越する、本來の眞骨頭であるからだ、自己の作品は詩ならざるものなしに宣揚する態度は詩人として餘りに當然過ぎる。自ら悔つて人之を悔るである。

▲『無人島』の題下に無人島を想像する事が詩的見地から悪いミ劍花坊氏が言はれたミすれば、夫れは多分深意があろう、言葉の表面だけのものでは氏は迷惑されるかもしれぬ、空想は詩の世界の一部で兒童は尤も美しい透徹した空想を描く畫でさへ常に夢をみる、兒童の神格化の魂の感激を心とするものが詩人であつて、星の世界に憧憬をもち大未來際に壯麗な極樂境をのぞむ、これは科學的智識や學問的知識で評議し得べき事でない、觀智想像は境地が永劫的の神秘性なもので事物悉く太陽

を慕ふ如き人間自然の所依である。若し空想の見地に立ち得ない藝術家があるならば、それは煉瓦ミセメントを握る建築請負師に過ぎない『無人島』にも本質的藝術家心が動かなければならぬ無論觀念的に何等の基因なく末梢神經をいらだたせる機智の雜念想像であるならば文字の手巧細工で生命のあろう筈がない、敢て『題』の罪ではない。

▲小林氏の『童謡の新研究』中、教授者が避けねばならぬものとして(一)なるべく題を與へない事(二)形式を指定しない事(三)個性を抑へぬようにすべき事(四)批評は緩やかにすべき事、等があけてある。而して吾人川柳詩をうたひ出す態度は之等を全部抹殺して其の裏に出る事も亦兒童ミ大人ミの感興智識、經驗の相異に因ることも申し得られよう。

▲故島木赤彦は『寫生は必ずしも今日に見てゐるもの耳に聽いてゐるもの體に觸れてゐるものを歌ふ事に限らない』否寧ろその經驗或る根強さを以て保存せられて更に表現の衝動を伴ふ時に如實に内心に結象せられる、結象せられるけれどもその結象は決して目で見たりも耳で聞いたもの體に觸れたものと同じくはない、寫生が接近を思ひふはこの爲であつて、實在ミ藝術ミ互に觸立し得るも亦この爲である。この獨立性は寫生によつて究極し得ると思はれるのであつてその極まる所の或る場合に全然形から離れた概念的なものへ踏み入ることもあるのであつて、左様な概念歌は寫生歌と言ひ得ざるも寫生歌ミ同

じ系統の上にあるものであつて藝術としての偉力を有ち得る點に於て寫生歌に異ならない」云、寫生主義を云ふ迄も押詰めていつた處に氏の權威ある詩的信念が諒認され、此の境地には「無人島」も當然材料たり得らる、

▲中川重麗氏がこんな事を言つて居るのは面白い「詩に詩題あり畫に畫題あり、彫刻に彫刻の題あり、院本に院本の題あるは猶ほ音樂に曲名あるに異ならず、斯くして其内容の何たることを表せるなり、されば詩の一句一句畫の一筆一筆が皆其題意に従はざるべからざるが如く音樂も亦其の譜は悉く曲名に缺くべからざるこゝ論を待たじ、東坡が石恪の三笑圖に題し三人皆笑ふ衣服冠履に至るまで皆笑態あり云へるは明かに此の消息を洩らし、筆々皆其の題意に従へるを激賞したるものならずや」云、題詠可否論の一資料

▲卑見を再言すれば題詠の可否は一つの啓蒙運動であつて、詩人としての自己を高所に置く場合には何等問題となつて來ない正岡子規も「歌を作るは善き歌を作れば則ち足れり、其方法は必ずしも問ふを須らず、題詠しても善き歌を作るを得ば題詠亦惡きに非らず」云言つて居る、こは詩人として當然の主張で古今を通じてもさらないのである。

▲今若し啓蒙運動として題詠を議するならば須らく廣い意味のものゝ完全なる意味を有せざるものを選び度い、そこに雜誌ならば主幹者の主張も存する事なる「突然」云云やうな題を

出して苦しめるにはあたらず、難題も研究上は可ならむも、それは研究であつて文學外の事に屬す、此頃「飛ぶ」云云頭を選したけれども佳吟がなかつた、子規も言つて居る、「苟くも善き歌を作るを目的とせば、課題なきも廣き意味の者を用ゐて餘り窮乏なる題を用ゐぬぞ善かるべき、終夜閑落葉なきいふ題は餘り狭くして題にならず、せめては夜閑落葉位には廣くせざるべからず」云、即ち川柳に於ても愈々窮して出たらめの題を課せらるゝは迷惑である、従つてよみ込み云ふ遊戯も行はれる事なる、少くもこんな事は指導者により避けられるのだから別個の問題として取扱ひ度い、又「兎」の題に「兎もかく」云ひは語句上の巧弄に過ぎない出題者の心も考へ度いのである、難題乃至完全なる意義を有する題を課したならば、作句者が當然束縛されて居るを思ふて趣向の妙味を得るは不可能たるを知らねばならない、元來「題」は詩の精神の焦點なのである故に吾等は尤も自由なる詩的見地に立ちたいのである。

▲時鳥云ふ題に罪ありと言つた子規の親切を味つておき度い「第一時鳥は聲を聞きて形を見ざるものなり、第二時鳥は夜鳴く鳥なり、第三時鳥の聲は隣間の聲なり、第四時鳥の歌は古來極めて多し、第五はさゝぎすは五字の音なり」これには一々説明がついて居るが省略した、吾等が各自に考察するの興を覺ゆるからで、従つて出題者の思慮もなる。

省二氏歡迎句會

四月九日夜
於端の坊

空車(兼題)

省二

選

『唐柳短解』其他によつてお馴染の本誌寄稿家、朝鮮の蛭子省二氏が夫人ます子、女史ご同伴來阪されました。本社では同氏の來阪を機として四月九日夜端の坊に於て其の歡迎句會を催しました。當夜は珍客省二氏御夫妻を初め、遠く松江より不二綱、和歌山より楓林、京都より紫明、神戸より清公子の諸氏が出席されるなごで非常な盛會振りを見、一同春の夜をゆくりなく作句氣分に浸りました。尙當夜は主幹路郎氏が、省二氏並に參會の諸氏へ親しく御挨拶をされる豫定でありましたが、病氣の爲遺憾乍ら缺席の不得止次第に至りましたので、同人の松郎氏が路郎氏に代つて簡單な歡迎の辭を述べました。次いで省二氏より御丁寧なる答辭があつて後、同氏選『空車』の披露に伴れて各選句の短評をされました。當夜の出席者左記四十三名。(二柳子記)

省二、ます女、清公子、雲雀、秋晴、山雨樓、白帆、源坊、蝶二、不二綱、源風、醉夢、正之、一醉、光吉、楓林、彩秋、葉平、紫明、案山子、眠聲、鮎美、かほる、義情、川洞、久郎、飯山、萬よし、美の作、三日坊、仙秋、双柳、吞陽、屏三呂、五六八、舟々、泰仙、松郎、三笑、文錢、二柳子(名簿より)

尙散會後左記の有志(水府、夢路、ひろし氏は途中參加)によつて省二氏夫妻歡迎小宴を催しました。盃が廻るにつれて一同例の如く自己紹介かたぐ『川柳を初めた動機』といふ題でスピーチをやり、夜の更くるのを知らず一同歡をつくし零時過散會致しました。(幹事)

省二、ます女、清公子、楓林、紫明、水府、雲雀、夢路、久郎、飯山、三笑、萬よし、松郎、ひろし、二柳子

空車世間は更けたなご思ひ
空車水の流れを見あいてる
空車になつて歸れば湯がたぎり
鶏は空車の上で延びあがり
空車子供親爺の眞似をする
後ろから旦那ご呼ぶは空車
空車しだれ櫻を眺めてる
空車判取重うゆれてゐる
空車子供を乗せて歸るなり
空車素氣なう人にすれ違ひ
空車子ひいて歸るも丁稚なり
空車さつきの坂を唄で下り
空車馬はいきつて家近し
空車ならべて車夫は將棋を見
街道に出て空車唄に成り
空車柳の蔭で煙草にし
棍棒へ腰掛けてゐる空車
空車置いて丁稚は香具師を見る
空車同じ速さで駆け廻り
空車露路へ一つ圍はれる
坂路を踊らせてくる空車
蠟燭を買ふこになる空車
(佳)腹掛の錢を算へる空車

選 子 行 蝶 二 葉 平 吞 陽 鮎 美 九 柳 久 郎 義 情 案 山 子 屏 三 呂 久 郎 舟 々 桃 哉 九 柳 其 象 桃 哉 不 二 綱 喜 夏 紫 明 彩 舟 白 帆 蝶 二 か ほ る

(佳)空車車掌は腕をくんでゐる 露斗
 (佳)四人連へ徐行してくる空車 醉夢
 (佳)空車曳いて 國道長い事 翠峯
 (佳)空車置いて一ぜん飯へ入り 鮎美
 (佳)空車みつて子供つれをよ 毒仙
 (佳)一と廻りと空車むきを替へ 憲翠
 (佳)花嫁の噂で戻る空車 山雨樓
 (佳)空車一杯きりの酔で曳き 一醉
 (佳)税關を出て喫うてゐる空車 雲雀
 (佳)空車空家の軒に列べられ 秋晴
 (佳)空車曳き可愛い子に出會ひ 松郎
 (佳)辻まちに御蔭の柳手が届き みの作
 (佳)空車灯がついてから疲ふ 其象
 (佳)荷造の邪魔にされてる空車 二柳子
 (佳)空車迎に來た子ひいて去に 飯山
 (佳)空車いつもこころで灯がともり 同
 (軸)空車語について横にそれ 省二
 空車空朋すへ無言なり 同
 廣告 源 屈 選
 廣告の下に目立つた店構の 久郎
 めくらばかりだ廣告の一頁 案山子
 廣告と思へぬ程の書つぶり 毒仙
 讀んで行くうち廣告と知る 川洞
 廣告に別にかはつた智恵も出ず 飯山

用のない廣告も見る避暑の宿 萬よし
 廣告に資金をみんな使ひ果て 不二綱
 廣告が通り盛りの邪魔になり 子行
 廣告で女房の無理もきひてやり 醉夢
 廣告のマツチも趣味の一つなり 白帆
 廣告に嬾さんと呼ぶ店火鉢 蝶二
 廣告をちつと見て居る病上り 松郎
 均一の廣告嫁は眼を睨り 雲雀
 廣告の工場の寫眞仰々し 同
 (佳)廣告の寫眞とてさびしがり 屏三呂
 (佳)寢靜まる町に廣告燈動き 子行
 (佳)廣告へ息子ひそかに損をま 鮎美
 (佳)廣告もなぐさみになる控室 松郎
 (人)妾もう廣告の手に乗らぬ 鮎美
 (地)ボスターに文士を立上げ程儲け 萬よし
 (天)廣告に小僧ばかりが雇ひた 同
 珍客 互 選
 ほられた犬を珍客はめるなり かほろ
 珍客へ妻の襟のあはてやう 三笑
 文樂へ來て珍客に喜ばれ 秋晴
 江戸つ子にちよとなつて尋ねて來 吞陽
 珍客で汽車の時間にまにあはず 仙秋
 珍客を圍んで夜の短かすぎ 流星
 珍客に挨拶念が入りすぎる 翠峯

珍客があぐらになつて面白し 水鏡
 珍客へまだ貧乏に暮して居 屏三呂
 珍客は皆見違へたやうに云ひ 案山子
 珍らしいお客さんだご母じらし 五六八
 珍客に妻は鏡へ用があり 源坊
 珍客は通天閣へ登らされ 双柳
 珍客に着せる布團を借りにゆく 義情
 珍客へ犠牲になつたい、藝者 不二綱
 珍客を子供近所へふれまわり 彩秋
 珍客に子供遊びにやらされる 舟々
 珍客に子供大きい聲で泣き 三日坊
 珍客の國の訛りに子は笑ひ 眠聲
 珍客へあれが淡路の灯で御座る 清公子
 珍客のそばに子供のかしこまり 楓林
 珍客へこの二三日日がつづれ 白帆
 珍客へこんな妾りして手を支ぬ 雲雀
 珍客に主の寢間も變るなり 川洞
 珍客をもてなしてゐる茶器一つ 一醉
 珍客にあんまり急な段梯子 美の作
 珍客を代る代るに子は覗き 紫明
 珍客へせんぐり子供藝が出来 子行
 珍客の靴の置場に迷ふ庭 蝶二
 珍客の手を押のけて妻を呼び 松郎

盛會に後ろは首がだるくなり
盛會ミ云ふにしてをく新聞社
盛會の折しも櫻咲ける宵
盛會にかほの雨が氣につかず
盛會に仲居の裾もちぎれさう
下駄札が新聞になる盛會
盛會の窓にヒヤシンス咲誇り
盛會の話は誰も得意なり
盛會の中に幹事の赤い顔
盛會にモダンガールの足長し
盛會にちりりさ見ゆる青疊
盛會へ世話方むしろかついで來

眠聲

場外で獅々吼する程盛會さ
盛會へ一人反感持つてゐる
盛會だなき入口へ立ごまり
盛會に下足番だけ不服なり
盛會に足らぬ火鉢がよせられる
盛會の下駄又下駄を踏越ゐる
盛會を本社主催さ書きたてる
盛會は下足の聲も違ふなり
盛會に幹事うつかり名を忘れ
盛會のあさは久仲に更けて行き
盛會の幹事へ電話けたまし
盛會に樂屋坐つてをれぬなり

同 子 行

盛會にこゝも土瓶のお茶を呼び
盛會の隅に中札積み重ね
盛會をよそに舞妓のほたん刷毛
盛會に張合ひのある巡査の眼
立錐の餘地なく何も判らない
盛會を話して見せる足袋の泥
盛會の煙つた中へ幹事立ち
盛會を出るさしきく降つても
盛會に花一つ見る折もなし
勝鬨のやうに聞ける盛會さ
盛會に母は窓から覗いて見
盛會の外に自動車靜かなり
盛會さ聞いて病床ちみ動き

同 同 不二綱 屈 源 同 山雨樓 清公子 松 郎 蝶 二

川柳書架 (二三)

荒木京之助句集

(白石維想樓編)

▲現代川柳家叢書の第二編である。巻頭には井上劍花坊、野口雨情、安倍季雄、白石維想樓、四氏の序の外に京之助氏の自序がある。今、雨情氏の序文の一節を抜いて見る。氏は次のやうに述べてゐる(前略)全く荒木氏は庄内酒田産の金満家にして郷土の徳望高き人格者である。句に氣品あるは人格のしからしむる。こゝろで、氏の藝術は氏その人の感じがする

高潔なる人格より生る、藝術は高潔である。然るが、氏の自序中にもある如く、川柳は「ユーモアを盛つた十七字型の詩である」から、その作品を吟味せずに、直に作者を想像して逸樂放遊の人の如く考へることが多い。このあやまれ考へは荒木氏の如き人格に接したさき「この人にして川柳の作家か」と驚くであらう。(中略)川柳が藝術的に獨立したものは、劍花坊氏の功績であるが、これを祖述することによつて荒木氏の如き人格者のあることは、川柳藝術をして一層の光彩を放つことと思はれる。(下略)尙、京之助氏は自序の一節に次のやうに述べてゐる。

▲昭和二年三月廿五日發行。菊半截一〇二頁。定價七拾五錢。發行所は東京市外大井町五三八五、柳樹寺川柳會。

粒々集

句稿 (三)

木村 半文錢

身を托すバンの大きな紙ン袋
夢に寢て夢にさめたり春七日
さる程に飢が迫つて寒の水
すなほな子手を出せくゝ鞭をやる
平家蟹にも一票を與へよ喝ッ
合掌す萬年草の中に残る雪
故知らず落つる涙は珠數に化し
鹽田の一つ一つに傾く日
死ねば秋否こよ冬こ答ふべし

小康十號分(以下舊稿)

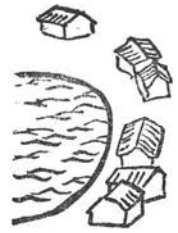
一日の足數だけは缺かすまい
斯う土を掘り返して何處を埋めやう
手帖の端へ若しや死ぬかも知れぬ
陳い事聞いても豆腐には解らぬ
机お前も明るい家に行きたいか

金魚の尾の價值ばかりこびりつき
元氣よく起きた子に時計ねらてやる
火事を見る此の路凍てゝ續く也
水平運動者の待つた日曜も雨だつた
子の箸の大きな牛肉やらじこす
何故こ知らず何をか過渡期こす
華表うしろより迫るこ覺け宮を出づ
今朝の味噌汁を推賞しておきたい
帽子眞深に海を越へつゝあり

陽春抄

安川 久流美

春はそれ洋杖の先に動いてる
抽斗をあけて用なし春麗ら
腕まくりして弱い男です
水くさい袴の皺さ差し向ひ
氣が變になつたさうだが喰つてゐる
靴の泥かはいて春を匂はせる
けふはリリーの煙り春そゞろ
新參にきた挨拶がもう崩れ
髭を剃つた人こ朔日にあひ
唇が好きだ、硝子戸拭いてゐる



奈良武の句

石賀馬行

新川柳興つて二十五年、川柳は益々普遍化され、その内容も追々複雑味の帯び來つた事は、當然の歸結は言へ喜ばしい限りである。然し乍ら今は既往を繼いで此間可成り多くの逸材の失はれてゐる事に想ひ到れば聊か感慨なきを得ないであらう。

六厘坊、青明、或は玩月、是等柳壇有爲の士が遠大なる理想、將また作家として確固たる自信を有し乍ら何れも大成せずして脆くも天折してゐるなさは後進の我々に取つて限りなき痛恨事ではある。故柳珍堂が終始黙の生活を續け、悠陽迫らざる態度で常に進取的高雅な佳品を示して居られたなさは周知の事實である。

是等の得難い先覺を失つてゐる吾人は或意味に於て不幸だとも言ひ得るであらう。

私は以上述べ來つた人達へ今一人竹林奈良武を加へたいと思ふ。奈良武は明治四十三年六月十二日三十一才を以て幽明界を異にしてゐるが現在あまり知られてゐない。斯く云ふ私は明治三十五年生れの青二才であるからともより知るよしもない。

只故人の作品を一讀するに及んで奈良武が正家として當時柳壇の先驅であり、稀に見る異才であつた事は想像に難くないのである。今も尙少し古い川柳家は故人の事なまよく御存知の事であらう。何

れ後日それ等先覺の御示教を仰ぐとして爰には只淺才なる私の眼に映じた奈良武を紹介するに止めて置かう。

確が大正十年頃の夏であつたと思ふ。

私は堺の町の古本屋を漁つてゐた。その時ふと或薄暗い店頭で明治四十年頃の柳詩數冊を發見したのである。その一冊が柳誌「新川柳」第三十一號（奈良武號）明治四十三年八月一日川柳社發行（横濱）であつたのである。茶色の表紙で菊版八十六頁、それが定價だの十錢である。扉には故人の小照及略歴が記され、當時故人と親交あつた川柳社同人拾數氏が追悼に筆を執られてゐるなまその友情の篤き涙ぐましい感じがある。さて奈良武の句は故人生前の主張に倣つてか、大膽にも「柳俳無差別句集」と題されその句七百餘「十七字天へ昇つて星さなれ」と詠じて自信の強さを示してゐる。奈良武の句を通讀しての感じは古調を尊重し乍ら

動もすれば是が非文藝的傾向に墮せんとする惱みを押し切りんとする努力がその何れの句にも至極鮮かに現れてゐて痛快である。それが時として清新、時として情味深々たる作品となり、その着想も相俟つてまさに柳壇の異色であつたらう事を思はせるのである。時として

慾張るも慾張らなくも五十年

セコンドの音にぞつて死に歩む

の如き單なる人生の概念にミッまる句

または

掛取の聲に裏より落ち給ふ
肩書が取れずナアに實力で行く
屁理屈をイヤ學説の眞理の
家に居る時は刻みを喫ひ給ふ
の如き當時柳壇の風潮の然らしむる處か
今より見て稍古い臭みの内容なり表現が
まゝ散見はするが、全部を一貫してそこ
に奈良武三云ふ何人も侵し得ざる境地に
嚴然光りを放つてゐるのである。私は今
爰には故人の佳作をおほしきものを録す

るにミッめ、奈良武に對する嚴正なる批判は何れ後日故人と親交あつた諸先輩の示教に俟つて物したいと思ふ。

宜敷を又宜敷ニ傳へけり

塔の脇からヒヨツコリミ月

ナニ已れが已れがの已れを捨てな

顔だけは見合でくミ見た物の

紙一重さても凡夫の淺ましき

パンの爲め噫此の膝を折らんかな

戀ならず酒呑む人となりにけり

箸つけて「コリヤ何ミ云ふ魚かの」

慾の世に寄附ミは汝奇特なり

生き延びて居れき御覽の姿にて

離縁してから軒の傾く

千鳥足四五本擱む縄暖簾

墓へ來て今のカアヤがいぢめます

分別を腕拱いて貸さんミす

綻び位傾城も縫ふ

仲裁のなぐられ損なりけり

住まんにはあまりにつらき浮世や

われ四十猶且つ斯くの如くなり
皆置いて行かねばならぬ物を溜め
足首に文はクシヤ／＼／＼ミなり
貸家の札の脇に今般

物思ひ横すぢかひに縫ひにけり

添寝の母の夢のきれ／＼

婿選み乳母も一人か二人云ひ

三代目かたの如くになりけり

さもそうさもありぬべし持參金

約束の夜の戸を押せば虫が止み

暮の文おつミ其手に乗るべきや

インキ壺二つ並んで赤ミ黒

姉が鳴らして渡す鬼灯

三百六十五日金々

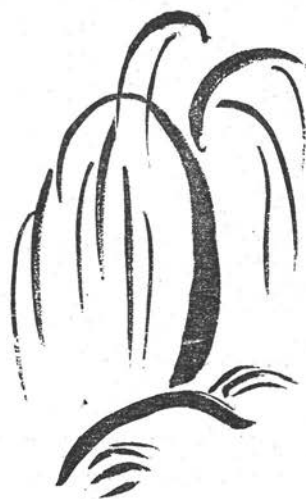
い／＼かけんにしなミ枝豆取上ける

汽笛が鳴つて二度のおさらば

貸したきり香奠ミこそなりにけり

博士だミ宙宇の謎が解けますか

近く秋や君が言葉のあきたらず



川柳塔

○ 塚崎 松郎

人形をいちめておればくもつて來
夫の云ふ通りの地位と思つて居
狂人が提けて縄は思ふて居
さほるこさばかり炭つぐのを忘れ
くやみ聞くにたわす唇かむで居る

○ 横田 眠聲

茶碗の音二階の子供おりて來る
電燈がほんやり赤兒の皮膚の色
小雨ふるいつそ別れよかとおもひ
山も春野も春すしを巻いてゐる
きれいずき子持の味を知らずして

○ 松本 助六

庭いぢりこのごろ小金ためてゐる
木の芽立ち馬鹿をさがしにくたぶれる
ビロードの襟からおけしだけが見
交際に一圓札の欲しい朝
お多福も言へず發育ほめてゐる
算盤をはじいて見ても損は損
儲かりもせぬが遊んでもをれず
お祈りの店には客のあるを知り
驚いた拍子に鹿のすまぬ顔

○ 麻生 霞乃

長男ロンドンを裏ひて

弟へ残す形見のかたボール
ロンちやんのわるさの竹も捨てがたし
ロンちやんご聞いた雲雀の空ごなり
ロンちやんの徳を姉へも聞かして居
紺紺今はアートのために裁つ

(註)アートは次男

○ 岩崎柳路

測量師今日もおんなし所に立ち
女から教そはつて来たおまじない
待つたなしのはずだご將棋もめてゐる
變電所見て恐しい氣にもなり
産立ての玉子を送り案じて居
宮様ご同じ列車で多摩御陵

○ 酒井駒人

賣出しの手傳に來て見込まれる
手傳に來て窮屈な飯をくひ
犯人は急行券を持つただけ

○ 檜山千代二

氣をそこねまいこの母のありがたし
親のありし日をくりひろげく
もごかしき列車よ親の身の上よ

○ 津田耕水
算盤の音きゝながら女房縫ひ
空箱をぎつさりご積む濱仲仕
子に玩具買つて嬉ばせうごする

○ 高橋かほる

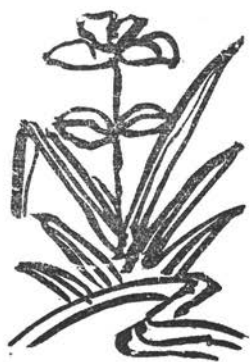
枚方は歌澤に好い所なり
よく賣れて涼しそうならしがらきや
魚島に魚屋海老も賣りたがり
姑も嫁も好きなりはちき豆
春らしく啞者に手まねで尋ねられ
長火鉢話ごぎれてもう五月

○ 庄萬よし

母ちやんを叱つては父笑ふだけ
重患を自覺してかの眼をひらき
上海の話ご別な踊の灯
六疊へ三組の客も春らしく
繪のこさを話せば畫會たのまれる

○ 橋本二柳子

果物屋もう陽があたりさうになり
一疋がをぐるご猿のみなをぎり
けふもまたしへたけられて穴をほる
父の下駄あけさいて子を風呂へ連れ



唐柳短解

蛭子省 二

(八一) 兄嫁を土左衛門にする馬鹿律義
あによめを見てゐて土左で仕舞

孟子に、「淳于髡曰く、男女援け受くるに親からせざるは禮か、孟子曰く、禮なり、曰く、嫂溺るれば則ち之を援けるに手を以てせん乎、曰く、嫂溺るに援けざるは是れ豺狼なり、男女援け受くるに親からせざるは禮なり、嫂溺れて之を援くるに手を以てする者は權なり、曰く、今天下溺る、夫子の援けざるは何ぞや、曰く、天下溺る、之を援くるに道を以てす、嫂溺る之を援くるに手を以てす、反手にして天下を援けんを欲する乎」

(八二) 鐵は唐 腕は日本で御誕生
日本のは手孕村事件である、唐は、太平

記に「昔周の末の世に楚土さいひける王武を以て天下を取りむために、戰を習はし劍を好む事年久し、或時楚王の夫人、鐵の柱に倚り傍ひてすすみ給ひけるが心地ただならず覺て、忽ち懷妊し給ひけり、七月を過ぎて後生産の席に苦て、一つの鐵丸を産み給ふ」

大國の鐵の柱の間男しやれ重いお子莫耶はさりあける安産の後は莫耶が育てあけ産屋から直ぐにかちやの手に渡り劍の玉子を産むだの、古今稀飛んだ産干將莫耶こりあける「楚土是を怪しし給はず、如何様は金鐵の精靈なるべしとて、干將さいひける鍛冶を召され、此鐵にて寶劍を作て進ら

すべきようこ仰せらるゝさあつて、談は支那式の妙味にいろ、

吳越春秋に、「吳王闔閭干將に劍を作らん事を請ふ、干將は吳の人、其の妻を莫耶と云ふ、干將五山の精六金の英を采の天地を候ひ、陰陽を伺ひ、百神臨視す而て金鐵の精未だ流れず、夫妻乃ち髮及爪を剪りて之を爐中に投ず、金鐵乃ち沸らぎ遂に二劍をなせり、陽を干將さいひ龜文をなせり、陰を莫耶さいひ漫理をなせり、干將其の陽を置し其の陰を出し以て闔閭に獻ず」

肩間尺意休らしいもひざりみね
虎溪は三笑肩間尺三いかり

今昔物語に「其後妻(莫耶)男子を生ぜり、其子十五歳に成る時に肩間一尺有り然ば名を肩間尺と付たり……肩間尺自ら劍を以て頭を斬つて使に與へつ、使頭を得て返つて國王に奉る、國王喜ひ給て使に賞を給ふ、其後肩間尺が頭を使に給ふて速かに此れを可養失き也と仰せ給ふ使仰せの如く其の頭を鑊に入て七日煮る全く不亂ず、其由を奏すれば國王怪しみ

給て自ら鑊の所に行て見給ふ間に、國王の頭自然に落て鑊の中に入ぬ、この頭咋合ひ諍ふ事無限し、使此を見て奇異也と思ふて、眉間尺が頭を令弱むが爲に、劍を鑊の中に擲け入る、其時にこの頭共に亂れぬ、使亦鑊の中を見る間に亦使の頭自然に落て鑊の中に入ぬ、然れば三の頭交り合つて何き云ふ事を不知す此れに依て一の墓を造り三の頭を葬りしてけり」

(八三)からからさ笑ひ三人名を残し

がからからさ笑ひ三人橋を越へ

虎溪三笑の故事で、諺曲『三笑』により

人に知られてゐる、

禁足を忘れて笑ふ橋向う

三國へびく虎溪の高笑ひ

衍さも都合六つの高笑ひ

三人が寄つて笑つてこけ出し

廬山記に「惠遠法師廬山に居るこ三十

餘年客を送るに足跡未だ曾て虎溪を過

ぎず、時に陶元亮、栗里に居る、陸修靜

も亦有道の士なり、遠師この二人を送る

に與に語りて道合し、覺せず虎溪を過ぐ

因て大に笑ふ今の世に三笑圖を傳ふ」

いざさらは駁遣逃れん虎溪まで 蕪村

中央線にこれをうつした虎溪山云ふ禪境がある、景愛すべく柳土の杖を曳れむ事を望む、禪門の一話柄になつてゐるが此の美濃虎溪に潭海和尚云ふ好色坊主が居て、横濱遊廓に金をかしたが維新當時で、容易にらちがあかぬ所から、遊女を代償として引ツ張り來り、便所へゆくにも連れていつた程で、或時其の女が外出して酒の相手をする者がないからこて信女ある位牌を持出し、差向ひていい氣になつて大盆を舉げてゐたと言ふ、

江戸の虎溪さいいつべし思案橋

吉原へ行かうか、堺町へ行かうかと思案した橋、「朋友の信士橋をうかり越し」

は深川。

(八四)大國に養由の弟子さんご無し

史記周紀に「楚有養由基者、善射者也、

去柳葉百步而射之、百發而百中之、左右

觀者數千人、皆曰善射」云、淮南子に楚

王に白猿あり、由基の始めて弓を調する

を見るや、木を斃して號ぶさある、養由

は死に及むで我弓を傳ふるなし娘の樹

花女に残したのが、我朝の頼光が家寶さ

なつたさある、即ち

五代目に唐の弓矢が役に立ち

頼光の弓の師匠は他人なり

頼光の武具あらましは貰ひ物

日本へ唐のむすめが矢の使ひ

雁をいたその矢で化鳥射て落し

もろこしの弓矢で鶴は射殺され

養由の一番弟子は日本人

なごある(參考曰、樹花女の出る土弓場

はいりがあり)一番弟子は頼光であつた

かもしれぬが、小由基と呼ばれた者は唐

にもある、宋史陳堯咨傳に、「堯咨善射

嘗以鑊爲的、每發必貫其中、時號小由基

尙ほこんな事もある「天に日十出たり一

して照すそら雨不降れば猶し旱也、何に

況んや日十出で、照すに、草木可堪きに

非ず、皆枯れ失ぬ、此れに依て國王より

始めて大臣百官及び民皆歎き悲しむ事無

限し、其時養由心に思はく天には日一出

る此れ人の業力に依て有る事也、而るに

今十の日俄に出たり、九の日は必ず此れ

國の爲に怪を致せるならむと思ひて、養

由弓を取て箭を矯て天に向つて日を射る

に九の日を射落したり、本の一の日は天

在して照す事本の如し、其時に養由が爲に射落さるゝ所の九の日は、國の怪也。云事を知ぬ、然れば皆人養由を讀めて歸伏する事限なし」

華櫻へ雷上動をたてかける
鵲ぎりで雷上動のさともなし

養由が所持した弓箭を水破兵破雷上動云ふは、物語本に載つて居るが徂徠先生に依るに雷上動は頼政藤になつてしまふ

(八五)和で紀信唐で鳥居を又感じ
奥平九八郎の臣鳥居強右衛門の剛勇振り
は、唐まで感動させて居るのである

鵲の眞似をした忠臣は強右衛門
九八郎身には、鳥居が百萬騎
忠臣は神代もきかぬ水くぐり
忠臣は末世にちぬ鳥居なり

長篠であつたら鳥居打たふし
水鳴子事をもせず鳥のすね
すねに疵つけて味方に勝利なり
命かけ丈夫なすねで綱を切り

こんな川柳や狂句が不思議な程澤山ある
そこで和を感動させた紀信はこんな事を
したかといふに、太平記に通俗に載つて
ゐる、昔強秦亡びて後、楚の項羽と漢の

高祖と國を争ふこと八十年、軍を挑むこ
そ七十餘箇度なり、其戰の度毎に項羽

常に勝に乗りて、高祖苦めること多し、
或時高祖榮陽城に籠る、項羽兵を以て城
を圍むこと數百重なり、月を経て城中に
糧盡きて兵疲れければ、高祖戰はむこと
るに力なく、遁れんとするに道なし、こ
ゝに高祖の臣に紀信といひける兵高祖に
向ひて申しけるは、項羽今城を圍みぬる
事數百重、漢已に食盡きて士卒又疲れた
り、若し兵を出して戰はば漢必ず楚のた
めに擒まならん、只敵を欺きて潛に城を
遁れ出でんにはしき、願くは臣今漢王
の譚を犯して楚の陣に降せん、楚ここに
圍を解きて臣を得ば、漢王遽に城を出で
重ねて大軍を起し、却て楚を亡ぼし給へ
ま申しければ、紀信が忍に楚に降りて殺
されん事悲しけれども、高祖社稷のため
に身を軽くすべきにあらざれば、力なく
涙をおさへ別を慕ひながら、紀信が謀
に隨ひ給ふ、紀信大に悦びて自ら漢王の
御衣を著し、黃屋の車に乗り、左轡をつ
けて高祖の罪を謝して、楚の大王に降す
る呼ばはりて城の東門より出でたりける

楚の兵是を聞きて四面の圍ひを解きて一
所に集まる軍勢皆萬餘を唱ふ、此間に高
祖三千餘騎を從へて城の西門より出で成
阜へを落ち給ひける、夜明けて後楚に降
る漢王を見れば高祖にはあらず、其臣の
紀信といふ者なりけり、項羽大に忿りて
遂に紀信
を刺殺す
高祖頓に
成阜の兵
を率ゝ却
りて項羽
を攻む、
項羽勢盡
きて後、
遂に鳥江
にして討
たれしか
ば、高祖
長く漢の
王業を起
して天下
の主にな
りにけり

ASAHI BEER
ASAHI BOTTLING
ASAHI BEER
ASAHI BOTTLING

募

集

句

鳥籠

執達吏小鳥の籠に蹴つまつき
毎晩の市に寝るれぬ鳥の籠
鳥籠の小鳥裏切るように死に籠
鳥籠の何百圓がたまに鳴きに籠
鳥籠を忘れた儘の朝さなりき
籠の鳥何か思案の首を曲け
千の無鰯籠町
鳥限美風二

妻

むつとした心妻子にさけて行き
日曜日妻の化粧に欠伸する
世間體早産さいふ事にしる
妻の手を引くは淋しい所だけ
應接も新妻らしき素振なりし
才媛云はれれば規則のやう
新妻へ赤い手柄は規則のやう
著音機を中に女房さ差向ひ
成功のもう一段へ妻は病み
人妻になつて世間を狭くする
皆妻を連れて行くのが妻不
下女の前で叱られたのが妻不
亡き妻の長所くを思出し
簪織りを肌身離さぬ気が知れず
妻の前身を語れささしなり
結局は妻の一人が味方なり
逸若滄昭豆籬鐵青一將千牛大句昇山
哉人海朗夢楓州水風兵鳥坊若月

井上劍花坊選

鳥籠をさけて屋根から屋根を這ひ
睦然さ鳥のは鳥籠の中ばかり
愁然さ鳥の出口をそら開け
鳥籠の鳥突き當り突き當り
鳥籠で屋根の瓦が見ゆるだけ
吐露五源水
山雨樓平坊郷

塚崎松郎選

さもあらばあれ女房に惚れて
理で勝て居ても女房負けて居る
もうちやつと後妻を連て歩い
新婚は一す出るにも氣兼ねをし
妻いつも後から寝ては先に起き
會社から掛れば妻の聲であり
すき焼に妻の吐言も煮てしまひ
貯めたがる妻に春着の當が有り
裏日向妻脊伸して干してゐる
新妻さ今日も静かに金貯につ
妻の名で地味に小金を貯居る
縫上ける妻に夕闇迫り来る
友達の前を早くも妻見付け
妻のこさばかり思つて旅にあり
色街を妻さ並んでつきぬける
若妻の明るい顔を髪に見る
彦吐銀杏志美無柳源醉耕綠樂一芳町
春樓柳三郎心坊造坊夢水明二笑仙二

川柳家の戸籍調べ

保馬行生

(一) 姓名 (二) 雅號 (三) 別號 (四) 現住所
(五) 生年月日 (六) 職業 (七) 好きな句 (八)
好きなタイプの人 (九) 自信の句 (一〇) 川
柳以外の趣味 (一一) 配遇者の有無 (一二) 嫌
ひなもの (一三) 川柳に手を染めた年月

(187) 神尾三休

(一) 神尾正 (二) 三休 (三) その時々と思ひ
つきにて惡戯することあり不定 (四) 渡島
國大野村 (五) 明治十六年四月二日生 馬
行君より初めて老兄と呼ばれたれき氣の
若さは今の若い方に譲らず、勿論川柳に
は青年なり (六) 官吏、北海道廳技師 (七)
澤山ありて片端より忘れる (八) 小股の切
れ上つた女 (九) さて之さいふ程のものな
し (一〇) 釣魚、圍碁、將棋、俳句、情歌
スポーツ、園藝但し百姓學校にて園藝を
専攻、おかげで園藝の盛なる當地の農事
試験場長の職にあり、されば園藝は趣味
の埒外にあるが如きも、眞鍮なる農事試
験に半生を送りて倦まざる、一に趣味な
ればこそ (一一) 有、小皺がよりにて自慢に
もならず (一二) 蛇、洋服の日本婦人、ブ
ル奴 (一三) 明治三十八年、其後三度中絶
したも五六年前より熱を失ひ、黒圖く

今に及ぶ。

(138) 富士野鞍馬

(一)富士野安之助(二)鞍馬(三)富士川柳之助(四)東京府王子町堀ノ内一三四(五)明治二十八年十月十三日生(六)酒造會社番頭(七)添乳して柵に飼がさざりやす(八)日本髪で所謂別嬪でなくとも愛嬌のあるハツキリとした中長顔、ごこかに粹なさのある地味造り、舞踊の心得ある身體のこなし、肥らずして脊の高い方、體量十二貫五百、身長五尺、足九文三分さいふごこでせう(九)近作「絹張へ紛々さ降る雪の音」(一〇)書道、我流講、弓術、琵琶、哥澤(一一)あり、長女は女學校へ今年はいります(一二)年寄(一三)大正五年十月。

(139) 齋藤丹三郎

(一)齋藤福、福はヤスシと讀む(二)丹三郎(三)化銀杏(以前芝區愛宕下町に住んで居た時)正覺坊(私は酒が好きで)今は何れも使つてゐません(四)東京市赤坂區表町三ノ三三(五)明治二十三年五月二十日生(六)小さな會社の支配人までも云ふ立場か(七)「日向から次第」に國が出來「尺一」さて余の來るあてもなし仁王門「張六」「三井寺の餘韻湖水へうなし込み」劍花坊「忘れたき事あり酒を毒さ知る」飴ン坊「御注進寄手の數に嘘を云ひ」

一寸行く妻の歸りの遅いこま 加地
人妻になつたさ聞けば惜くなり 督坊
茶をたてる時は他人のやうな妻 深春
世話好きな妻に苦勞の絶間なし 三日坊
妻の母留守を選んで遊びに來 秋晴
兒を抱いて妻の買物待つてゐる 千代二
香奠の額には妻も口をきき 柳秀
おち様の留守を近所の子で遊び 羊司
新妻の甲斐くしさは紺紺 山雨樓
妻が有り今日も日向に稼いで居 鎌月
妻さ云ふ意識に朝の飯が出來 聞路
撥だこのある妻にと世辭もよし 彌生
遅なつた妻言譯を子にさして 翠峯
米汁へ妻一粒も見の がさず 同
同窓が來るさ娘の聲になり 柳陽
アルバムを出せば後妻の氣がいら 同
また里へ行く氣の帶を染て居る 光路
手束ねに妻のしまつは結ばれる 同
脱捨てだん着見せて妻の留守 同
追かけて來る妻の手に忘れ物 馬行
バルコニー妻と並んで芝居めき 同
三越で買ふたのを妻派手に持ち 同
佳句
酒のしみ妻は仰山さうに干し 三笑
早速に籍も入れたい息子の氣 五平
物干で妻の病氣を尋ねられ 山月

妻の留守をさびしく覗く洗面器 芳雪
折にふれ妻の心も酌んでやり 毒仙
妻の聲電話になるさ他人じみ 夢人
若かりし日の妻のこなき思ひ たけを
親の正直をそのまゝ嫁ぐなり 柳坊
妻の留守日干にならぬ程度なり 翠峯
泥酔の歸れば妻もあるならん 無限
妻のある事に氣付いて宿を出ず 南海坊
家内には内諍だよさ五圓札 萬よし
この先の行路へ妻さ向ひ合ひ 柳陽
偶然の出來事妻に養はれ 眠聲
嫌がつて貰つた妻のやうでなし さゝ舟
妻なればこそ酔ふたのを寝かせ 花蝶
炭つぎに妻結立ての髪で來る 朱唇子
餘りよく働いて夫の氣に入らず 笑人
妻の留守洗濯物が乾いて居 秋三
人前で妻あればさにお辭儀をし 山雨樓
慇懃な妻の襟へ勸誘員 光路
見切品妻ひつこけきひつこけき 同
蠅入らずの中も妻はいふて出る 同
聞いてるさ妻いつかきに世帯 馬行
恩人へ妻妻らしい贈り物 同
頼りないさ思つたか妻貯め初め 同
秀逸
今日からは妻ささ日の眼を覺し 利劍坊
(評)多くを云はすして餘情をもたせた所

手柄なり

しつけ糸取つて夫を若く見る 鮎美

(評) 境地眼前に現れたり。軽い調子もびつたり合つてゐる。

ひと寝入しても起てる針仕事 柳秀

(評) 東洋健兒を思ふさまに活躍させ得るもの豈アカギレのせし一婦人。この句を特に淺薄なるモダンガールに贈る。

欺けば妻いそ／＼茶を入れぬ 大夢子

(評) 悪い意味に欺いたのではあるまい。罪なことを思はすまいとの、慈愛のこもつた夫の所謂方便に信じて、「それはさぞ遅く迄お疲れでしたぞう」さ、いそ／＼として茶を汲み乍ら、歸宅した夫を迎へる良女の晴々しい笑顔に、一層慙極はまつたといふ場面を巧に現した句、決して凡手に非ず。

内縁の妻に氣付けば止まる針 柳陽

(評) 非凡なる作者の詩趣のひらめき、描寫の巧みなる寸分の隙もなし。日本文學に川柳詩在り、さ大呼する。

子を解き妻しんみりぞ我を見る 羊司

(評) さびしい句である「しんみり」を我を見る「老手」なり。

病む母にきこぬやうに妻は 同

(評) 古句の行き方によく見る叙法ではあ

るが、複雑味をよく客觀化してある。

子がなくて妻の白粉さびしがり 同

(評) 第三者の立場より詠んで成功した句表現に苦心のあとが見える。

妻見えす枕許なる新聞紙 馬行

(評) 表現に於てすぐれたり。馬行調既に一家を爲す。

妻の何か言ひたさうなる嵐の夜 同

(評) シーンを想はす。「の」は一見駄足のやうなるも、この一字こそ却つて調子を引締たり。

妻の寢息に遙か脱稿 同

(評) 「武玉川」の撰者慶組逸の靈にさへげんか。

出勤に妻の無口が物足らず 同

(評) かつて路郎氏が腹乃さんとの新婚當時の句に「妻やまたん靴音を高めんか」があり、今馬行君がこの句を生む。三十餘生の僕、只管に衣の綻びへ頭を下ぐ今日、將來愛妻を迎へて斯の如き句を得る日あらむや兩氏の健在を祈る。

妻ひとり居れば鶏晝を啼き 同

(評) 作者かつて啄木を讀じ、槐多を語る拙吟

拙吟

妻がきけばひしひし有難い御經 松郎

そのあさの悔みを妻が引受けて 同
選後慢語 「妻」には大變佳句が多かつた。

水府、まだ澤山あります(八) 中肉中脊で下町式の人、それであり内氣でない方がいゝ、顔は丸顔より瓜實、勿論私の趣味にぴつたり理解のある人(但しこれは自分の妻としてさ)(九) まだ一句も出来ません、自分で好きな句は「鏡臺に魔がさす話紅を溶き古い句逢へばたゞ漫談それがなつかしく」去年の句(一〇) 旅行登山、スポーツ、酒及それに伴ふものいろ／＼(一一) まだ一度も持った事がありません、持たうと思つた事がないのであります、その爲めです(一二) 蛇、洋食、氣障な奴、お汁粉、三味線を弾いて騒ぐ事、無意味に人に頭を下ける事(一三) 大正五年の十月に、死んだ林鐘子にすゝめられていや／＼乍ら作つたのが相憎人位に抜けて、それからかなり奮闘しました今はとても駄目です、親爺が俳句の宗匠をして居ました關係で俳句畑の出です。

(一七) 桑島文絲

(一) 桑島良一(二) 文絲(三) 司峰逸人、大塊堂、碧柳、幽美(文藝には主に文絲を用ひ、彫刻、圖案は右のものを用ひ)(四) 石川縣輪島鳳至上町九(五) 明治三十四年十月一日生(六) 漆器圖案、彫刻師(七) 生きて居る幸へ米屋が取りに来る(久流美) 子を呼ぶ聲に外聞もなし(飯山)(好きな句はノートブックに記入し、すでに七册

課題吟集編輯に於て、斯る力作の數々を得る事は、本誌の誇りとする所で、私の喜びは勿論、諸君の努力に敬意を表したい。

因に一部の投句家の中には、五六句若くは一二句送られる方があるが(それも佳句であれば結構であるが)どうも斯く少數を送

豆腐屋

◇ 雅 幽 選

タ方の忙しさ豆腐屋行違ひ 美髮坊
豆腐屋の奥に娘の三味をひき 鮎 美
豆腐屋が来れば頼むと妻は出る 醉 夢
豆腐屋はいつもの通り置け行き 加 地
豆腐屋の鈴に驚き米をさぎ 五 平
路次口で更に豆腐屋聲を上げ 節 太郎
知らん顔して豆腐屋は通りすぎ 籬 楓
油揚げの匂ひ杉垣越してくる 天 溪
豆腐屋の娘手柄の赤い事さ、舟 仙
豆腐賣りもう鼻唄で戻つて来 芳 仙
豆腐屋を通行人が呼んでやり 千 鳥
豆腐屋を呼ぶに店番腰をあけ 水 郷
勝手口並び豆腐屋迷わされ 一 笑
豆腐屋も来ないので、鏝を切り 萬 よし
豆腐屋の急ぐ此の邊塀つゞき 吐 露 樓
豆腐屋の聲に母親針を置き た け
豆腐屋の息子一人前になり た け

られる方は大体初心者に多く見る所で、返つて佳句に乏しいやうに思はれる。これ等の方は兎に角、一時相當自信を得られる迄はなるべく多く作つて來られる事をお勧めしたいのである。亂作でない限りの多作は向上の點に就いて必要である。(松郎)

關本 雅 幽 共選
岩崎 柳 路

鱈すくう形で豆腐屋掬ひ上げ 彌 生
豆腐屋の鈴に一人はお暇をし 大 夢 子
豆腐屋の灯がボンヤリと朝の霧 羊 司
豆腐屋の店を仕出した律義者 大 公 坊
一寸戸を開けて豆腐屋挽き始め 鐵 洲
待たされて豆腐屋名札を讀み 光 路
豆腐屋の豆腐にふれる指捌き 町 二
味噌越も出てラツバを腰に差し 豆 蔓
豆腐屋の少しは洒落も言ふ男 秋 晴
満洲の豆腐屋苦力に荷を持たせ 花 蝶
豆腐屋も通り宿舎の鉦が鳴り 柳 秀
豆腐屋の車陣へよく止まり 源 坊
豆腐屋が來て暮の路次またゞし 利 劍 坊
政治論豆腐屋にしては變り者 同
豆腐屋も休み町内須磨へ行き 眠 聲
こんちは豆腐屋聲をかせ行き 同
二等卒で歸り豆腐屋續けて居 山 雨 樓
豆腐屋はうつむいた、路次へ入り 同

を越の六十頁もの)(八)テキバキとした現代向の女、モダンガールと迄ゆかぬ所が好きでもさより自分を知れる女が好き(九)研究中なれば昨日のものが今日に至つて、缺點を見出すほぎであるから今のさころないと言つて可。(一〇)庭球、撞球、圍碁、讀書、日本書及び圖案に關するものを集めることが何よりの趣味(一一)よくやつてくれるなと思ふ事もあり、腹の立つ場合もあるが一人あり、みにくからず。(一二)人間を見下けてものと言ふ奴。男らしくない世辭を言ふ人。(一三)大正十四年二月頃からボツ／＼やり初めて、十五年金澤百萬石誌へ投句して、安川久流美先生より御教示に預かりほんさうの柳味にひたる事を得たのに初まる。

(一四) 中見光路

(一)中見光次郎(二)光路(三)竹城(四)南海線粉濱町(五)明治廿二年三月八日(六)塗料問屋ノ古番頭(七)夕暮に空地へ出るが里心(八)云ふ様な句(八)肥の氣味で綺麗な齒の白く取立て別嬪云ふ程ではないが、人好きのする特徴のない顔、理屈を抜きにし明るう動いて呉れる人耳隠しより丸髻の似合ふ方が良い、性分も同様(九)「タクシー」にみさもない程子は騒ぎ、今の處これ位の程度(一〇)害がなければ何でも好き、暇がないので何れも我流

山門を出るさ豆腐屋すぐ鳴らし

秀 秀

豆腐屋に聞け明けがたからの雨

豆腐屋を下女ミ丁稚で迷わせる

(軸)豆腐賣濡れてる雨の美しく

◇ 柳 路

豆腐屋の両丁薄い丈でよし

自轉車で丁稚豆腐屋を追つか

豆腐屋の奥に娘の三味を弾き

年月を豆腐屋暗い家に生き

豆腐屋の鈴のせわしい横小路

豆腐屋は辻を曲るさ水をはね

豆腐屋の起きたも姑知つてゐる

兄に教へられて豆腐を賣に出る

豆腐屋の聲に大空白んで来

豆腐屋の喇叭に妻は針を置き

豆腐屋は今日の夕陽を背にうけ

豆腐屋を呼ぶに店番腰を上け

豆腐屋はいつもの通り置き行き

馬の息白し豆腐の穀あける

前掛の下に豆腐屋を呼ぶ小皿

よく賣れる辻に豆腐屋荷を下し

豆腐屋のラッパに暮れる港町

豆腐屋の笛夕暗の露路へ消に

豆腐屋の車時雨の中に見

夕立を待つ豆腐屋に暮れ近く

豆腐屋の露次から露次へ書さ

同 眠 山 雅 選 千 水 鮎 秋 籬 源 五 節 利 柳 醉 加 荒 深 牛 柳 千 代 二 柳 坊 夢 人

豆腐屋へ八百屋へ肉の友を遣り

豆腐屋の少しは落着も云ふ男

豆腐屋の灯がほんやり朝の霧

豆腐屋のキラズの湯氣も寒い朝

豆腐賣歸りは唄に變つて居

麻裏が豆腐屋の庭を飛んで出る

豆腐屋さ魚屋が来る車井戸

賣切れた豆腐屋の庭鳥が鳴く

豆腐屋の聲にれんじを一寸開け

豆腐屋に聞けば明け方からの雨

風呂も出来豆腐屋も出来新開地

豆腐屋が見附朝火事無事にすみ

豆腐屋のにがりの過事事を詫び

やんわりさ載て豆腐サイに切り

豆腐屋が通り宿舎の鐘が鳴り

佳 句

朝詣り豆腐屋はもう店を開け

豆腐屋の今日は違つた道を行き

豆腐屋の急ぐ此邊解つゞき

豆腐屋の荷が春雨に濡れて来る

豆腐屋の荷へシヤボン玉消行き

賣切れた所で豆腐屋水を捨て

待たれて豆腐屋名札なごを讀み

二等卒で歸り豆腐屋續けて居

山門を出るさ豆腐屋すぐ鳴らし

田樂の唄を豆腐屋病み續け

提け箱の雪豆腐屋からつゞき

豆 秋 羊 町 二 芳 仙 一 笑 耕 大 夢 花 眠 同 萬 柳 同 秀

(一)無事に連添ふて十一年(四女あり)

(二)街氣(一三)大正十五年「柳雜誌」

三月號密柑に初めて應答。

(742) 源 代 雪 洞

(一)源代政雄(二)雪洞(三)蟬脱または

「まさる」(四)石川縣輪島町中場五明治

卅四年二月十九日六漆器販賣業七そ

の時(八)で絶えず移動しつゝあり(九)女

らしい女(九)母の愛だけで淋しい日が

つゞき「淋しさ」に男も遂に走り出し「お

身内さ知らず噂をしてしまひ」(十)閑若

花いじり。撞球。茶の湯。ボート(十一)

まだ無妻(十二)取り立て、云ふ程變つた

事もありません(十三)昨年の十月頃です

前 號 正 誤

▲四月號「唐柳短解」十四頁中段「琴離

の股倉隣すれが出来」は高、▲「戸籍調」

中高木夢二郎氏の住所「内村」は知内村

初めた年月「大正四年」は七年の各誤り

◇ 券 る ◇

■大阪夕報柳壇(雜吟) 松 耶 選

■大正日報柳壇(同) 馬 行 選

■太陽日報柳壇(同) 二 柳 子 選

■新聞裏雜誌柳壇(同) 萬 子 選

■同覽誌、雜吟三句五月末締切社宛

右何れも投句は直接選考宛の事



ロンドン君を悼む

可愛い魂

井上 劍花坊
井上 信子

らない淋しさです。さうぞ御二人様、御氣落しなくおからだを大切にして下さい。其内吊句でも作つて、あの可愛い魂に捧けようと思ふて居ます。

澄子君、アト君はじめ多くの同胞の方がズラリ悲しさうな顔で、並んで御通夜をせられるのが目の先にちらつきます。

(三月五日) 路郎宛

天國の子供

川村 花菱

ロンドン君が死去されたさいふ黒袴ハガキを今川柳雜誌社から受取つてビックリしました。信子は雜誌で御病氣のこころを知つて御見舞を上げた次第ですが、劍花坊ははじめて知つたのです。うしろあたまを何かでガンミたくれたやうに何さもない淋しさに囚はれました。あなた方は一度子を亡うた御経験がおりなされるが、私共はまだ経験が無い。そんなこころが有つたら辻もたままい。氣が狂うかも知れない、と思ふ。こころにあの藝術的な顔をして居たロンドン君がもうこの世に居ないさいふこころは、一度御目にかゝつたこころのある劍花坊にはたま

川柳雜誌を頂く度に、編輯後記を拜見して、貴兄の御病氣の事が出て居ないのを見るに、悉く安心するのが毎月の例でした。昨日三月號落手、直ちにその事を氣にする。此度は御家族皆さま御風邪の由にて殊にロンドン様御重態の記事を読んで大變

暗い氣持になりました。ミ本日誌社から御逝去の報に接し、いまだごなにも御目にかゝらないのにこんな事を申上げるのはお世辭のやうにもなりますが、眞實我子を失つたやうに悲しましました。御一同様の御慰傷さぞかし御くやみ申上げます。往年四歳の次男を失ひました時には、夜叉郎がまだ達者で居りまして、遠く金澤の地に

天國に可愛い子供一人殖ね

の句を電報でよこしてくれましたが、私共夫婦は聲をあけて泣きました。

世間ではいろ／＼に批評もありませうが、我子程に美しい可愛い子供はありません。肥つたぶ男の子ではありませんが、近所の子供のする野球の眞似をして、ミットの代りに足袋の古いのを手にはめてゴムまりを投げて遊んで居たのが疫痢でやられました。親の枕邊にその古たびが置いてあつて白い顔をして死んで居たのを女房ミ私の長男が今日も忘れずに泣きます。

當時私は妻にそむいた女がありまして、その子の死は此の愚かな父を叱りつけるのださかと思はれませんでした。まして春のやうにおたやかな御家庭にありまして、兄の御悲嘆は素より御奥さまの御涙の種いばかり繁かるべきかを思ふに只々深い

吐息をもらすばかりです。

何事も申上げられませんが、謹んで御哀悼申上げます。

(三月四日) 路耶宛

噫！ ロンドン君

龜井 花童子

願ひれば一昨年の春、妻とお邪魔をした時でした、純子さんがお留守であつた丈で其の他の方々に逢はれた。其時二階へロンちゃんに来てリーダーの一を読みそして自分よりも上手にABCを書かれたのに一驚した事は末だに頭脳から去りませんそして快活なお話し振日も必ずしも日々訪問する同人達を喜ばした事と思ふ。

本社からハガキを受取つた私は人一倍煩惱な丈けにもうロンちゃんに逢はれない、その悲しみが胸一つばいになつて無言のまゝハガキを妻へ見せた。然し壽命は云へ九年の間父母を慰めた事はむしろ徒勞ではなかつたでせう。

追悼吟

風がないのに木の葉が落ち来る
リーダーの本が遺品になつた朝



松
郎
編

紋太居小集（神戶）

楊井二南報

鐵力

契柳　睡花　嶺月　同紋　素生　同清公子　同
契柳　睡花　嶺月　同紋　素生　同清公子　同

密航は無事によつて道をきゝ、
密航のもう晝だとも夜だとも
密航は腹の減つてゐるまゝ上り
密航は嵐を走らねばならず

契柳　睡花　嶺月　同紋　素生　同清公子　同

突然の一人内地で捕へられ
密航の段々膽がすはつて來
密航のまんまさ陸が近くなり
密航をしたが病氣になつてゐる
出帆をするまで息を殺してゐる

突　然

突然を詫びて思案をして貰ひ
突然に來たさそつつかしい男
突然の様なふりして逢ふてゐる
突然な手紙下宿に旅費もなく
大勢で來た突然を喜ばれ
突然に來て傳風を待たしてゐ
突然の計にもう一度讀み直し

野　暮

從いて來た野暮へも同じ花あられ
禁酒禁煙私は野暮で暮します
野暮なのへ仲居忙しう酌いである
本當に亭主の野暮を今日は知り

同　夢　二　紋　素　契　睡　清　嶺　二
遊　南　太　生　柳　花　公　月　南
子　子　子　子　子　子　子　子

酒落何の手筈へもなくもう云はず 素生

東京小集吟 千代二 報

世々人人が櫻にうかれてゐるのをよそに、
二柳子兄から兼ねてきてゐた小池俊坊君
を交へて、怪氣風の柳路に自分さ或ビルデ
ィングで小集を催しました。みんな上方がなつ
かしこ、花咲く春も亦一人なつかしく、路耶
さんや紋太さん等の噂まで散會したのは十
一時頃でした……千代二……

ホテル、金齒

バラソルがホテルの塀に沿ふ午後
金の齒が描つて銀氣がちびひ
唄ふ人の口にきらり光るもの
ホテルのつべへん／＼烏翼をかけ
金齒ら／＼見るとすはな笑ひ聲
あこがれの都金齒も一つ入れ
ひさかぶり金齒おんなど音がする
なんかあるらしいホテルの萬國旗
ソフラーに倚つてホテルの外は雨
尋ね人金齒のこさも書いてあり
女工ふさ金齒入れたいなと思ひ
出戻りの笑ふ金齒の淋しさよ

萬よし川柳(第三十三回)

題「先輩」 塚崎松郎選

雄辯がつい先輩を軽んじる 馬行
同郷會先輩ごつくくだけたり 秋晴
社を退いてからも先輩顔を見せ 興詩夫
先輩の豪語するのも頼母しく 朱唇子
先輩へ皆無事ですき嬉しさう 督の字

手眞似までして先輩の親切さ
酒の息又先輩を困らせる
先輩に紹介されてお辭儀をし
先輩を淋しがらせる程の戀
叱られて来た先輩に叱られる
先輩と同じ詭りで差向ひ
新參をつれて得意へ才なし
先輩さいふ自惚れも手傳ふて
先輩の車掌袂で無駄を切り

眠聲
なりな
柳秀
のぼる
同
吐露樓
光路
進一郎
不滅

佳句

連れてゐたかど先輩着換へてゐる
先輩に濟まない程にまである
柔道二段 先輩にまだ遊んでゐる
後進の道を開いて店を持ち
思ひきや先輩茲で煙草賣る
カフエで會へば先輩打ちさける
青影子
其象
山雨樓
毒仙
同
憲翠

三才（粗景進呈）

(人)先輩の母は拜まんばかりなり　青影子
(天)先輩へ戀を譲つて旅に立ち　白蝶
(地)弟の事も先輩例にひき　醉夢
　軸芭蕉の句ばかり先輩例にひき　松郎
　(軸)先輩を訪ふ小さんを處に行き　同
次回題「登山」五句、駒井美の作選、締切五月
十日、天地人粗景呈

省二氏歡迎會（山口）

(四月四日) 柳川洲馬報

蛭子省二氏上京の途次を迎へて、當地森脇旅館に歓迎句會を催しました。洲馬

外郎 互選
白外郎さげ山口をさようなら 遠

糸屋町より

第九回 於舟々居

三月二十日、拙宅に於て、第五回糸屋町小集を催す。當夜は川柳雜講社より松郎、飯山三笑、三氏、加香氏と出席されたり。嬉しかった。グループでは、遠く京都より京郎、守口より新水、五六八、小阪より羊紫樓君等、市内よりは翠峯、流星、中井、ひさし、三日坊、紫二郎、毒仙、舟々まで十六名、何れも熱心に句作三昧に入つた。雜吟の清記五選に次で飯山氏選の「歡迎」松郎氏選の兼題「約束」の披露の後に松郎氏より、川柳に關する有益なお話があり、最後に記念の寫眞撮影をする事になりおぼつかず私共がシャッターを握つた。斯くて意義ある第五回小集は午後十二時すぎ盛會裡に散會した。(舟々報)

「約束」 松郎氏選

一寸した約束事が大きなり 五六八
約束はフト耳打ちでつけ加へ 翠峯
(佳)約束をするに商賣氣を放れ 流星
約束に違ふさ内儀付と云ひ ひさし
約束は約束としてマア注がう 舟々
約束を誓ふて済まぬ氣で戻り 同
約束を背中へ受けた梯子段 京郎
(佳)親々の約束 娘細うなり 同
約束の中に發車の笛が鳴る 毒仙
(佳)約束が大聲に空なる舟さ舟 萬よし
約束の朝はスツカリ空家なり 同
愚友の時刻たがへず待て居り 三笑

(石川縣輪島) 桑島文絲報

案山子

旅先で關係のない火事を朝

同

機にカフエー、火事、朝

銀笛

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

悠太郎

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

朝の煙ごも負けない様に立ち

同

(佳) 次の日を言へば羽織の襟を折。
(佳) 人前もあるに待たせた事を詫。
(佳) 約束の戎橋にて裾が冷。
同 飯山

「歓迎」

飯山氏

臨来の客あり酒のはすむこと
おつき合に歓迎の辭を述べて居る
歓迎の席で暫く無沙汰詔び
歓迎の文字は終門に見上げられ
歓迎の席からわけしてしみく
歓迎の人へシンから惚れた顔
歓迎の中に交つて涙ぐみ
歓迎にお客まつくまいことか
歓迎に休みが二日續くなり
歓迎に今更親の有難さ
(轉) 歓迎に國訛りまでなつかしき
同 飯山
同 松郎
同 毒仙
同 舟々
同 翠々
同 三日坊
同 羊紫朗
同 中井
同 京郎
同 選

松江七日樂川柳會(一)

(四月七日夜) 幹事 仙坊報

丸鬚、山、和尙

丸鬚も主人のひげによく似合ひ
丸鬚のそとる歩きへ花が散り
丸鬚に結ふたを或る夜夢に
丸鬚へ投げた瞳を奪はれる
丸鬚を結ふる姉はフケに見
落籍されて丸鬚の型だれにさう
丸鬚が似合ふ着物の柄を撰り
内職の妻丸鬚の派手過ぎる
花吹雪山姥の様な人が立ち
冬枯れの山一つある石も冬
自轉車で下る坂道唄が出る
同 大鳥居
同 銀星
同 變牛
同 仙坊
同 粹浪人
同 梅笑
同 穂波
同 銀星
同 隆馬

山男浮世を外に生き延びる
たまの日曜を登山に疲れて來
登山道ロックサツクの重いこと
山彦の方へ一行顔を上
春の灯に山葵が利いた溜涙
登山服ニコリとして寫される
山へ来て飛脚一層早くなり
山櫻おぼろに月が浮いて見
かけ聲もさざれく登る山
インドウを渡す和尙キツなり
團體の中に和尙の目立つこと
山賊に逢つて和尙の素直過ぎ
大和尙おつさめもせず慕を圍み
(二) 於仙坊居 (四月十七日)
賣上げ
賣上げへあしたの休み嬉しさう
賣上げの模様で變る西瓜賣り
賣上のこれはばで生きられず
主人より聞けば賣上げ少な過ぎ
賣上げの勘定小うるさがり
表、酒、
(五)

梅笑
らん馬
祥月
敬馬
あん馬
變牛
穂波
同 牛
變浪人
同 波
同 仙坊
選
銀星
同 隆馬
同 仙坊
同 粹浪人
同 隆馬
同 銀星
同 仙坊
同 穂波
同 一丸
同 敬馬
同 仙坊

ほろ酔をいゝ事にして金を借り
晩酌は女房の素振り見てるなり
萬よし偶會(一) (三月十五日)
先生へきまり口を言ふ謝恩會
停電にきまりの悪い鬚にふれ
半分を刺身にさして店へ出る
陳列の刺身も夜の色となり
踏みそふな中で下足はよく動き
叱られたこともうれしい謝恩會
激論に刺身ごころの沙汰でなし
(二) (三月二十四日)
東京雀吟社利二郎氏來訪
雪洞へ男をだます顔を向け
雪洞の咲く時が春だと思ひあし
雪洞の灯に似て雛妓今日を酔ひ
まゝしさに青い眼ばかり論ふてゐ
夢を踏む娘に戀もなく暮れる
雪洞の都踊りも京らしく
雪洞を遠く放れて相思なり
童謡の國に労働爭議なく
童謡の切れたところで寢てしまふ
春の灯にそむいた譯を友言はす
(三) (三月廿五日)
萬年筆窓から梅の香が匂ひ
何を書く積りかパーで萬年筆
判取へ萬年筆の字がかすれ
商用の外に萬年筆が入り
萬年筆女子判任の氣焔なり
自宅はさ萬年筆を軽く持ち
(四) (四月十五日)
同 穂波
同 三日坊
同 白嶺
同 舟々
同 翠々
同 木村
同 萬よし
同 利二郎
同 屏三呂
同 萬よし
同 萬よし
同 秋晴
同 靈翠
同 白帆
同 萬よし

編輯後記

▲當欄の初めに當つてまた悲しい事を報ぜればならぬと思ふと、メンの先が逝つてくる主幹路郎氏が病氣で入院された。一體路郎氏一家の不幸は、先にロンちゃんを亡くされ引續き、ちやんの入院に、子を持ち親を持つものゝ、ひさしく涙なくては居れないではないか。その矢にまた、路郎氏が本月初めより病氣で床につかれ、本月九日には高熱の爲に大阪の大學病院楠本内科に入院された。「鴈チアス」に決定された時は、同人はみな心配した。私も一時は呆然とした。今萬一の事があつたら大變である、私は祈りに祈つた。幸ひ長崎醫學博士の御盡力によつて學長、楠本博士初め、主任の小林醫學士其他醫員諸氏の權威ある手厚い加療と、霞乃さんと佐藤看護婦の涙ぐましい介抱とで、十四五日頃よりだん／＼癒くなられ、この五六日前より平熱が持續してゐるので、私は漸く安心する事が出来たのである。チアスのあさは誰でも打つて變つたやうに、丈夫になるさといふ事なので、皆がその事を云つてはせめてもの路郎氏を慰めてゐる。路郎氏も病床にそれを樂しみに思つてゐられる、本號が出る時分には餘程元氣になられること、思つてゐる。さういふ次第で本號當欄は私が受持つ事となつた。幸ひ雜誌の方は、同人の然によつて、編輯其他の事務は着々／＼として運ばれて行く。

▲續稿中の「柳樽評釋廿四編まで」や「川柳漫畫」並に本號で發表の豫定であつた「埋め字川柳」等は筆者路郎氏が病氣の爲次第まで待つて頂きたい。

▲本誌の寄稿家朝鮮の姪子省二氏が、ます子夫人同伴で四月七日に來阪された。(途中山口へ寄られ、同地在住の本誌同人柳川洲馬主館の歡迎會に出席された)八日の夜本町橋の太田旅館に同氏を訪れ、盡きぬ話を打切つて十時頃から御夫妻と夜の道頓堀を散歩した。九日は同人の二柳子の案内で、奈良を見物されて、夜は別項本社主催の歡迎會に出席された。越けて十一日は入院中の路郎氏を見舞はれて、二柳子と夜の神戸覆面川柳社主催の歡迎會に出席される等、元氣な中に十三日無事名古屋へ出發されました。折角の珍客を迎へ乍ら何一つおあいそも出來ず、殊に主幹の病氣の爲一層失禮をした事をお詫びする次第であります。尙同氏は名古屋より横濱を経て目下東京に滞在されて居る。

▲本誌の選者甲府の篠原春雨氏は、今度六年振りで上京、初代川柳翁の墓に川柳界の今日ある事等を欣ばれた。この通信をいたゞいた▲今度大阪夕報に柳壇開設、私が擔當する事になつた、旺んに投句されたい。

▲番倉川柳社では、其の十五周年記念會を四月十七日午後一時より清水町四君子亭に於て催す。本社より二柳子、かほる、萬よしひろし、三笑、松郎が出席、席上私は主幹路郎氏に代つて祝辭を述べておいた。作句後餘興等があつて非常な盛會であつた。

▲尙同日東京では、關東川柳聯盟大會があり金澤にも第四回金澤川柳大會が開催され、共に盛會だつた由、斯界の爲に喜しい事である其の關東聯盟會には、東京在住の本誌同人の柳路、千代二、駒人の三君が揃つて出席したと云ふ通知があつた。

▲今度新に松江の新進作家、奈良井仙坊君が入社して、松江支部をもつてくれる事になり四月廿日に松江支部會を催された。句稿は次號に於て發表する。

▲現代川柳叢書の第二編「荒木京之助句集」が発刊された(本號川柳書架參照) 譯讀をお勧めしておく。

▲同人馬行は今回「石賀」の姓を名乗ることになつた。同時に住所が、今度町制で大阪市外豊中町榮通二丁目と改稱になつた。

▲同人朝陽は近頃耳を患つてゐる由、速に全快を祈る。

▲同人ひろしは、四月十五日から朝日會館で開かれてゐる中央美術社フランス繪畫展覽會にて多忙。

▲河野春三氏は博多、長崎方面へ旅行された。

▲岡田柳造氏は元の郊村の號に復活された。

轉居

▲安西杏三氏は全快で退院され、大阪市北區岩井町二ノ九上杉方へ。▲小路京二氏は大阪市東區南久寶寺町通一丁目津島方へ。▲海野夢一佛氏は東京市外日暮里日暮里冠町二丁目七〇三番地へ。▲坂根一角氏は大阪市港區八幡屋龜町一丁目へ各轉居された。

(四月廿五日、松郎生)

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

▼書籍はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」ミ封筒に朱記するこゝ。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこゝ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信封入のこゝ。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信封入のこゝ。

募 集

第四卷第七號課題

五月十日締切。
(各題二十句以内)

- ▼鱗 森 東 魚 選
- ▼染直し 林 田 馬 行 選
- ▼公 用 中 野 柳 陽 共 選

第四卷第八號課題

六月十日締切。
(各題二十句以内)

- ▼相 談 篠 原 春 雨 選
- ▼漁 師 柳 川 洲 馬 選
- ▼少 年 井 上 刀 三 共 選

每 號 募 集

- ▼近作柳極(卅句以内) 麻生路郎選
- ▼各地柳實(會報) 塚崎松郎編
- ▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價 定

- 一部 參拾錢(郵)
- 六部 壹圓六拾錢(稅郵)
- 十二部 參圓(共稅郵)

廣 告 料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりぞ御指求願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和二年四月廿五日印刷

昭和二年五月一日發行

第四卷第五號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸 二郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發行所 川 柳 雜誌社
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

振替大阪七五〇五〇番

川柳雜誌社事務所

大阪市港區八條通二丁目十二番地

賣 捌 店

- (大阪) 明文堂 公立社 柳屋和正堂 三笠屋
- (東京仲見世) 玉森堂 (神戸) 米田 後藤 (金澤) 石井
- (函館) 石塚 (廣島) 金星堂 (石川縣小松) マコト屋

讀書子に告ぐ

今のやうにあさから／＼新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こうなればわざわざ新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に公立社の棚には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にさつては、誠にありがたしい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。つまらぬ事のやうであるが實行されたならば決して損の無いことがわからう。

(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

清 酒

母親も白鶴ならこ一つ受け
恩給も近く白鶴樽で据ゑ



灘 津 攝

釀 社 會 名 合 納 嘉

川柳雜誌社同人

主幹

麻生路郎

龜太德西西橋原馬井伊石岩

井田本垣場上藤賀崎
花朝双三松柳史月刀彦馬柳
子陽柳笑雨子風兎三造行路

松安柳矢黑奈津塚竹高高橋

井田良橋
本川木田崎內見
ひ右井か
助洲葵耕松多柳眠
ろ大仙仙ほ

六し馬臣豆坊水郎聞骨る聲

檜庄三喜酒佐麻駒藤藤
山好田井々生井本
千萬飯駒木美卯
代よ革黙之

二し郎山人關乃作園助

(いろは順)

道頓堀支部

大阪市内區新戎橋南詰

萬よし

山口支部

山口縣山口町石原小路

馬

天満支部

大阪府北區南同心町二丁目一

史

豐中支部

大阪府外豐中町榮通二丁目

馬

濱寺支部

大阪府泉北郡濱寺町一〇〇七

朝

東京支部

東京愛宕町一ノ一六大成社内

柳

築港支部

大阪市港區八幡屋町二九〇ノ二九

飯

函館支部

函館市青柳町五〇

柳

城南支部

大阪市東區餌差町二二一番地

美

住吉支部

大阪府住吉町安立町五丁目二二

柳

西宮支部

西宮市興古道町三二

の

仁川支部

朝鮮仁川仲町一丁目八

柳

淀川支部

大阪市東淀川區南濱町一九四

豆

松江支部

松江市雜賀町一ノ一

柳

神戸支部

神戸市湊町一丁目電氣局西

松

岡山支部

岡山縣玉島町

水



非常に愉快に聴ける

貝印内外

レコード

御家庭の喜びは

このレコードから!!

一枚は一枚づゝ

笑ひが漲ぎる

レコードの花形!!



合資會社 内外蓄音器商會